

第三回韓国言語文化研修で得たもの

信州大学大学院 1年 城間友美

研究生 中野真樹

学部 4年 平野涼子・三間美奈子

学部 3年 大内佳苗・門脇恵利子・新藤みのり・鈴江卓馬

福本奈央子・向出真理子・矢嶋直子

学部 2年 田口愛葉・中島葉子・上田尚子・大槻華乃

長尾文子・山崎有希・宮脇淳暢

二つの交流

信州大学大学院人文科学研究科 1年 城間友美(言語文化専攻)

韓国、そしてカトリック大学校への訪問は今回で4度目となる。今年の9月には「インターンシップ海外日本語教育実習」の実習生として1ヶ月間カトリック大学校でお世話になった。実習を終えて帰国してから3週間後の韓国言語文化研修旅行を、私は今まで韓国を訪れた中で一番心待ちにしていた。

今回の交流の目標として、「心を開いて礼を尽くす」という全体の目標とは別に、私自身には二つの目標があった。一つ目は同世代の若者同士としてカトリック大学校の学生と日常生活を共にし、楽しく交流するという日常的な交流であった。インターンシップ海外日本語教育実習の期間中は教育実習生という立場でカトリック大生の皆さんと接していたのだが、実は「教師」という役目と「学生」である自分自身のバランスを取ることがとても難しく、最初の頃は学生の皆さんとろくに会話を交わすこともできなかったのだ。何か話したいことがあっても、「この話題は教師として適切なのだろうか、この言葉は日本語教師としてどうだろうか？」と躊躇してしまい、話をする機会を逃してしまっていた。教育実習生生活も後半になれば学生との会話も自然に増えていったが、もっと話をしたいと思う頃には帰国しなければならなかった。このような不完全燃焼があったために、今度カトリック大学校を訪れたときにはより多くの学生と話をしようと思ったのである。本研修旅行では、学生代表をはじめとする積極的なカトリック大生のおかげでより多くの学生と話をする事ができた。特に嬉しかったのは、日本語を学び始めたばかりの1年生が勇気をだして交流会に参加してくれたことである。もどかしそうに、それでも必死に自分の気持ちを日本語で伝えようとしてくれる彼ら、彼女らに胸が熱くなった。

二つ目の目標はカトリック大生と日常的な交流を越えたもっと深いところにある言わば精神的な交流である。何度か交流を行ううちに、「韓国やカトリック大学の友達は好き

だが、ただ楽しいだけの交流だけでよいのだろうか。」という疑問が生まれてきた。幸運にも今年はカトリック大の中学校の中野敦先生から「韓日親善友好のために何ができるか」というテーマでカトリック大生と信大生の討論会を設けてくださるとの申し出があった。カトリック大の4年生以上と信大の4年以上の学生が日本・韓国という国の問題について考え、また国という概念を越えて自分達の意見を交しあった。私はプラス、マイナス両方を含めた複雑な気持ちを正直に伝えたいと思った。カトリック大生もそれに応えてくれた。普段は冗談を言って楽しい話題ばかりだった友人達と、互いに心の中を垣間見ることができ、真の交流に一步近づくことができたように思う。日韓(韓日)間の距離は近くなったのだろうか。今はまだ目には見えないことのほうが多いのかもしれないが、今回の討論会の中で出てきたカトリック大生の「私は民間外交官になりたい。」という言葉が今も心に残っている。

今回の交流期間は、私自身にとって日本語教育という観点からもとても有意義なものであった。多くの日本語を学ぶカトリック大生と接触することにより、例えば日本語を学びはじめて日本人と話をしたことがない1年生には1年生がわかるような日本語を、留学経験があり日本語での会話に慣れた4年生にはより自然な日本語をというふうに、相手に応じて日本語をコントロールする練習ができた。また、カトリック大の日本語・日本文化の授業を見学・実習することにより日本語を学ぶ学習者がどのような人で、どのようなことを考え、そしてどのような授業を受けているのかといった海外における日本語学習者の実態を知る機会に恵まれた。日本語教育学専攻生にとっては、よい刺激になったのではないかと思う。

今回の韓国言語文化研修旅行は、日本語教育学専攻学生だけではなく、他専攻の先生、学生も参加してくださった。国際交流・大学間交流という名にふさわしく、交流の輪が広がってきていることを第一回目からの参加者として非常に嬉しく思うとともに、今後もこの交流が末永く続くことを心から期待したい。最後に、お世話になった姜先生、李先生、中野先生、市岡先生そしてカトリック大の学生の皆さん、引率してくださった沖先生、潮村先生、信州大学の学生の皆さんに心から御礼を申し上げたい。

異文化に接して自文化を見た

信州大学人文学部研究生 中野真樹(日本語教育学専攻)

私がカトリック大を訪れたのは、今回で3回目だった。1回目の訪問は2000年の3月で、私は2年生だった。この時は、3泊4日という短期間の交流だったが、その中で、カトリック大の学生と独立記念館を訪れたことが忘れられない。そして、大変なショックを受けた私のそばに常に寄り添い、気遣ってくれるカトリック大の友人たちを忘れることはできない。

2回目の訪問は去年の秋で、私は4年生になっていた。この交流では、日本語教育実習という機会を得た。授業作りの大変さを身にしみて感じたと同時に、同じだけの達成感も得られ、大変貴重な経験をさせていただいたと思っている。実際、不安と緊張を抱えたまま始まった教壇実習だったが、なんとか最後までやり遂げることができた。そしてそこにはやはり、カトリック大学校の皆さんのあたたかい眼差しがあった。

そして今年の秋、カトリック大学校への3回目の訪問が実現した。今回は、過去2回の時とは異なる要素が加わっていた。男子学生の参加が増えたのだ。また、日本語教育学専攻の学生だけでなく、社会心理学や東洋史専攻の学生も加わった。このように、参加者のバリエーションが増え、参加人数も去年の倍になった。これは、カトリック大学校の学生にとって、触れられる日本語のリソースが増えたということでもある。また、両校の社会心理学専攻同士で討論会が行われるなど、専攻の枠を越えての交流は、大学間の学術交流という面をより充実したものへと発展させた。

また、今回の交流に参加して、新しい認識もいくつか得られた。まず、言語活動とは、私にとって「生きている」ということととても近いものだという認識である。それは、カトリック大学校の学生との交流の中で、普段より意識してことばを使うという行為をつづけた結果得られたものである。私は、常に言語活動を行っているのだ。日本にいればそのような当たり前すぎる事実気づく機会はあまりない。無意識にことばを使っていることが多いのだ。カトリック大学校の学生にとって、私たちと接したことの意味のひとつは、教室の中で学習した日本語を実践で使う機会となったことにある。一方、私たち信州大学の学生は、意識的に日本語を使うという経験ができた。これは貴重な経験だ。意識的に日本語を使うということは、自分の気持ちととことん向き合う作業であると思う。また、その気持ちをどのようなことばで表現するかという選択の作業でもある。このように、ことばを意識的に使うということは簡単なことではない。しかし、それはとても大切なことであると思うのだ。ことばを無意識に使ってばかりいると、自分の気持ちが見えなくなってしまう。自分の気持ちが見えないまま、真剣な態度で人と向き合うことはできない。だから、ことばを意識して使うということは、「丁寧に生きること」や「真剣に生きること」と深いつながりがあると思うのだ。

では、自分の気持ちや自分の考えを知るためには何をすればよいのだろうか。私は、二つのことが必要だと思う。まずは、勉強をすることだ。勉強をすることとは、他の人の考え方を知り、その上で自分の考え方を確立していくという作業であると思う。自分の気持ちや考えというものは、自分の中でだけ考えていてもわかってこないものなのだ。そして、もう一つは、常にアンテナを張っていることだと思う。ほんの小さな出来事からも、自分を知る手がかりは得られると思う。

「貿易日本語2」という授業に参加させていただいたとき、「日韓友好親善のために私た

ちができること」というテーマでディスカッションを行った。その中で、やはり歴史問題が話題にのぼったが、私はうろたえることはなかった。それは、今回の訪韓前に歴史的経緯について何冊か本を読んできており、自分なりの意見を持っていたからである。そして、私が意見を述べる際、食い入るように私を見つめる学生がいた。友達になろうとしている人だから、あえて触れることはないのではないか、と心のどこかで思っていた話題に真剣に向き合い、真剣に議論ができた。それは、緊張感があり、しかしとても充実した時間であった。このような機会をもっと持ちたいと思った。自分の考えをもち、それを相手に伝えることの緊張感と充実感はとても心地のよいものだった。

今回の交流で、私はまた新たなことを学ぶことができた。そして、新しい出会いがたくさんあった。そのことに感謝せずにはいられない。日本語を学んでいるカトリック大学の学生の皆さん、皆さんが日本語を勉強しているから私は皆さんと出会うことができました。そして、気持ちを伝え合うことができました。本当にありがとうございます。そして、このような機会を与えてくださったのは、カトリック大学校、信州大学両校の先生方です。心より感謝を申し上げます。

韓国研修旅行を終えて

信州大学人文学部 4年 平野涼子(日本語教育学専攻)

今年で2度目のカトリック大学校への研修旅行である。去年の研修旅行は、アメリカ合衆国での同時多発テロや日韓の歴史教科書問題が世間を賑わせていた時期であり、不安を抱えながらの出発であった。しかし、今年の日韓共催のワールド杯直後ということもあり、日本国民の韓国への関心が非常に高まっている時期であった。また、今年日本語教育学専攻の学生以外にも、社会心理学の潮村先生をはじめとする他専攻の方が5名加わった。そして何よりも今年男子学生が3名も参加し、バラエティーあふれる韓国研修団となった。

まず、私が研修旅行を振り返って思い出すことといえば、カトリック大学校の皆さんの笑顔である。仁川空港の出迎えから見送りまで彼らの顔から笑顔が消えることはほとんどなかった。笑顔というものがこんなにも人を和ませてくれて、お互いの距離を縮めてくれるものだという事を感じた。

自由行動でソウルの街をパートナーと一緒にいろいろと歩き廻ったときもそこで出会った韓国の人々はみんな笑顔であった。そんな彼らの笑顔のおかげで私は自然と心を開いて交流をすることが出来た。

先にも述べたが、今年バラエティーあふれる韓国研修団だった。それを一番感じたのは、2年生と4年生以上のフリートーキングの実習である。この実習に4年生以上の学生がアドバイザーとして参加することを私は非常に不安に感じていた。フリートーキングな

のでカトリック大学校の学生と楽しくおしゃべりをする気持ちで参加するように2年生には言ったものの、何人かのカトリック大学校の学生の前で、ある題材について分かりやすい日本語で話が出来たかどうかという心配があった。しかし、出発前にフリートーキングで使う題材の打ち合わせを2年生一人ずつと行ったとき私の不安は消えた。2年生全員が、題材をいくつも用意してきてそのどれもが本当に一人一人のカラーが出たすばらしいものだったからだ。実習当日も、2年生はカトリック大学校の学生一人一人と話すように、ゆっくりと相手の目を見ながらとても楽しそうにフリートーキングを行っていた。

今回の研修旅行では、私は2、3年生からたくさんの刺激をもらったように思う。学年、男女、専攻の違う学生が様々ないるということは、カトリック大学校の学生の皆さんにもいいことだと思うし、日本人学生側としても様々な分野の人たちと会話し、考えに触れる機会があるので非常にいいことではないだろうか。

実習後、中野敦先生から頂いた指導で「楽しいだけで終わらせてはいけない。」という言葉があった。帰国してその言葉の意味を改めて感じている。今回の研修旅行は、旅行ではない、研修旅行なのだ。ただの旅行なら楽しいだけで終わって充分だろう。しかし、大学のプログラムの一つである以上、研修旅行は何らかの研究に使えてこそ意味あるもののように思う。カトリック大学校で日本語を学ぶ学生にとって信州大学の学生は、生の教材である。カトリック大学校の日本語を学習する皆さんに、日本語を向上させるような動機付けをしてあげることが重要である。日本に留学しない学生にとっては、教室で習った日本語が実際に日本人と交流する場面で、使用し交流できたということは、今後の日本語を学ぶ学習意欲に大きく影響するのではないだろうか。そして、私たち日本人学生も今回の経験から得たものをそれぞれの研究分野で生かしていくことが必要だろう。

カトリック大学校と信州大学の交流は、これからも続いていこう。これまでの交流での経験が蓄積されて今後の交流へと繋がっていき、少しでも多くの日韓の学生が顔の見える交流をしていってほしいと思う。

最後になったが、カトリック大学への研修旅行の機会を与えてくださった姜先生をはじめとするカトリック大学校の先生方、学生の皆さん、信州大学の沖先生、潮村先生に感謝しております。

再会と新しい出会い

信州大学人文学部4年 三間美奈子(日本語教育学専攻)

1. はじめに

昨年に続き私にとっては2回目の韓国カトリック大学校訪問である。再会とともに新しい出会い、発見があった。印象に残ったことを以下に述べたい。

2. 実習「フリーターキング」

2年と4年以上は、「中級日本語会話2」の時間をお借りしフリーターキングを行った。私たち4年は、昨年と同じ実習を行っていたため、その先入観で、準備のほとんどはメインの2年生の指導をしていた。直前に、授業時間全てを任せていただけることがわかり、急いで授業案作りを行った。そのため、昨年のスタイルをほぼ踏襲する形になってしまった。もっと、実習に対する意識を高めていれば、早めの自主的な行動に出られたであろうし、授業内容や組立てに工夫ができた、と反省している。

4年の担当は、進行と全体の統括であった。導入部に一番気を遣い、授業の内容をはっきり示すことと興味を持ってもらうことを念頭に置き、ことばを選んだ。授業ではあるが、堅苦しくならないようにも心がけた。フリーターキングは、2年と研究生・院生が行ったが、私のサポートが入る余地もない位盛り上がっていた。若者文化や大学生活、伝統文化など、個性を生かしバラエティーに富んだ内容で、カトリック大の皆さんも身を乗り出して聞いていたのが印象的であった。

3. 交流

昨年知り合った人と再会出来たのは、この訪問の大きな喜びであった。昨年のパートナーは東京に留学中であったが、一緒に自由行動をした人などが顔を出してくれた。

今年のパートナーは私と同じ4年生で、就職の話などをした。就職活動は4年の後期、ちょうど私たちが訪問した頃から始まることや、空港などで働くには身長が163センチ以上なくてはならない(私にはとうてい無理)など、とても興味深かった。また、韓国では休学をして就職のための勉強などをする人が多く、日韓の大学生事情の違いに驚いた。自由行動では、昨年と趣を変えて、現代韓国の若者文化に触れようと思い、パートナーにお願いした。城間さんとそのパートナーと4人でまわった。パートナーが普段よく行く所に連れていってもらい、一緒に買い物などを楽しんだ。ホームステイ先では、夕飯はサムゲタン、朝食にかぼちゃのおかゆと、どれも手の込んだ料理を用意していただいた。とてもおいしかったが、私は一度にたくさん食べられないので、申し訳なく思った。夜は仕事でお疲れなのに、お父さんが夜景を見にドライブに連れていってくれ、翌日はチムチバンへお母さんも一緒に行ってくださった。家族みんなのもてなしが温かく、本当に感謝している。

研修院などで行われた交流は、ゲームや日韓文化の意見交換などのプログラムが用意されていた。今年は両校とも男子学生の参加があった。またカトリック大からは1年生も参加してくれ、信大からは社会心理学の学生も参加して、個性豊かな交流ができた。かなりの大所帯で全員との交流は難しく思えたが、ゲームなどの作業を通して自然にみんなと顔見知りになれた。1年生はまだ日本語がほとんど話せないが、ゲームで活躍しており楽しかった。

4. 今後の交流へ向けて

今年は、二つの実習に加え信大主催の交流ゲームが行われた。事務手続きから交流ゲームの準備まで、メインの3年生は本当に大変だったと思う。昨年経験者である私たちのバックアップ不足もあり、申し訳なく思っている。私たち信大側も大変だったように、カトリック大の皆さんはもっと大変であったはずである。現地に行ってから、なるべく協力しようと思がけた。もてなしを受ける側は、快くそれを受け取ることも大切だが、それなりにお手伝いできることはあるはずである。交流会の準備・片づけ、研修院のそうじなど、自主的に信大側でできることを今年以上に考えて続けていって欲しい。また、交換留学生として今後信大に来たり、日本に留学に来た時は、お返しするよい機会である。

4年という事でカトリック大を訪問することは今回が最後になった。昨年は日本語に自信がなかったので、手紙(メール)が書けなかったという友達から、今年は早選手紙が来た。今度は個人的な交流を続けていきたい。

このような機会を与えてくださった、カトリック大の諸先生方、学生の皆さん、また信大・沖先生、潮村先生にこの場をお借りして御礼申し上げます。

文化交流とは人と人との交流である

信州大学人文学部3年 大内佳苗(日本語教育学専攻)

「韓国文化を五感で体験すること」ということが今回の韓国言語研修旅行の個人目標であった。また、全体目標は「心をひらいて、礼をつくし交流する」であった。韓国へ旅立つ前、この2つの目標をどれだけ達成することができるかということが不安でもあり同時に楽しみでもあった。

10月20日夜、仁川空港に到着した。初めて来た韓国。街並み、周りの風景はさほど日本とは変わりはないと感じたが、あらゆるところにあふれるハンゲルを目にして徐々に韓国に来たのだという実感がわいてきた。そしてこの日初めてカトリック大学の学生達と会ったのだが、学生達の明るさと親しみやすさに非常に驚き、それまで緊張していた気持ちが和らいだことが大変印象的である。

10月21日、この日はスピーチコンテストがあり、夜は歓迎会が開かれた。スピーチコンテストでは、カトリック大学の学生達の高い日本語能力に圧倒された。さらにスピーチ内容も韓国の学生の様々な主張を聞くことのできる興味深い内容ばかりであった。その中でも「愛を知れば人生がわかる。」という言葉が今でも鮮明に覚えているほど印象に残っている。日本語を母語としている私でもこれまで耳にしたことのない日本語の文章であった。歓迎会では、カトリック大学の学生達と初めて交流することができた。日本の音楽、映画、ドラマに日本人以上に詳しい学生がいるなど色々な学生と話すことのできたとても有意義な時間であった。

10月22日には、韓国語講座と日本語授業見学があった。日本語授業見学では、中野先生の「中級日本語会話2」と市岡先生の「現代日本人の生活と日本大衆文化」を見学させていただいた。これまで本の中でしか知ることのできなかつた日本語教育を、海外でかつ自分のこの目で見ることができた。学生が生き生きとしている授業であると感じたが、このように学生にとって魅力ある授業とするためにはどれほどの事前準備や経験が必要なのであろうかと思い、日本語教師という仕事への興味がこれまで以上に増した。

10月23日は、市内見学、ホームステイがあった。ホームステイ先の学生にソウル市内を案内してもらい歴史的建造物や韓国若者文化に触れることができた。案内してもらっている間彼女といろいろなことを話したが、韓国の学生の関心事も日本の学生の関心事とほぼ同じように感じ、親近感がわき何故か心強く感じたのを覚えている。ホームステイ先の御両親にも温かく歓迎していただいた。御両親との別れの時、感謝の気持ちを伝えようと思ったのだが、ひたすら「カムサハムニダ」一語の連呼になってしまい、韓国語がもっと話せたらと大変歯がゆい思いをした。

10月24日は、日本語教育実習「松本・信州大学紹介」があった。韓国に旅立つ前から準備を重ね実習直前まで打ち合わせをしていたため、大変緊張した気持ちで臨んだ。実習は、信州大学の学生とカトリック大学の学生の多くの質問によって大変活気のある授業になることができた。

10月25日は、カトリック大学の学生たちによる日本語演劇発表会があり、夜は送別会が開かれた。日本語演劇発表会では「新ももたろう」と題して日本の昔話「ももたろう」を現代化し、笑いを取り入れた内容となっていた。日本語の上手さはもちろん、「笑い」を時折感じることでできる劇に終始夢中になってしまった。後からカトリック大学の学生から聞いたのだが、この演劇発表のため夏から準備や練習を始めていたということを知り非常に感動してしまった。自分だったら韓国語の劇をこれほど上手に制作し成し遂げることができるだろうかと自問自答し、カトリック大学の学生達の日本語能力と団結力にあらためて脱帽した。夜は送別会が開かれた。約1週間で随分仲良くなることのできたカトリック大学の学生達といろいろな話をしたりし、最後の夜を遅くまで楽しんだ。

10月26日、早朝にカトリック大学を発ち、昼頃に名古屋空港に到着した。久々の日本の街並みに少々の感激と韓国を離れた寂しさを感じたのを覚えている。

韓国で過ごした1週間は、言葉では言い尽くせないほど多くの経験を得ることができた。韓国を発つ前に立てた二つの目標は達成することができたのだろうか。個人目標も全体目標も達成できたように思う。韓国の学生との交流を通して生きた韓国文化をからだ全体で感じることができ、交流した多くの人たちに心を開き、礼をつくすことを心がけることができた。しかし二つの目標は、この研修で出会った全ての人々の力なしでは到底達成できなかったことである。また、事前に目標を立てるということがこの研修を大変実り多いもの

としてくれた。私にとって今回の韓国言語研修は人と人との出会いの尊さ、人は自分一人の力のみで生きているのではないということを実感することのできた意義のある1週間であった。

韓国で得たこと

信州大学人文学部3年 門脇恵利子(日本語教育学専攻)

2002年10月20日、昨年に比べて約1週間早い今年の韓国訪問、私にとっては再会の喜びと新しい出会いへの期待に胸を膨らませた出発であった。準備に追われ空欄だった私の日記には、2週間ぶりのコメントとして次のように書かれていた。「いよいよ出発。後は行くだけだと思ったらやっと思感が湧いてきた。これから1週間私は韓国で何を見て何を得てくるのだろう。ここからは私自身との勝負だ。これを越えたら、どうかわって行くのだろう。」と。このことは韓国で過ごした1週間に、この時私が想像していた以上に私自身に大きく関わった問題となった。交流を通して得たことと、実習から得たことのそれぞれについて以下に述べていく。

今回の交流の大きな目標として昨年に引き続き、「心を開いて礼を尽くして」ということを持っていた。昨年の経験から得たことを少しでも今年の交流に生かしてみようと思っていた。この点に関しては自分でも目標を達成できたのではないかと思っている。自分を出すということは、正直私にとってはとても勇気のいることだったが、その勇気を出すことで何十倍もの勇気を相手から受け取った。1週間という短い期間の中で、「また必ず会おう」と心から言いあうことのできる相手になれたということは、なんととってもこの事があったからであろうと思う。

今年の内市見学は私とパートナーの二人で行った。パートナーのジョン・ビョンヒさんは一年生だということにも関わらず、とても日本語が上手だった。特に忘れられない思い出の1つに二人で日本の映画を見たことがある。韓国で日本の映画をハングルの字幕で見るとするのは(ととっても私はハングルを読んで観ていたわけではないのだが)とても奇妙な感じがしたが、時々館内に響く笑い声はなんだかとっても心地良かった。

彼女はいろいろなことを話した。私が母語である日本語をなぜ勉強しているのか、彼女はなぜ外国語として勉強するものに日本語を選んだか。このことによって私は自分自身の勉強の必要性を今まで以上に強く感じた。いや、それよりももっと日本語について知りたいという自分自身の興味としての意欲に火がついたといったほうがいいのかもかもしれない。ビョンヒとの会話はそんなことを私に気付かせてくれた。ビョンヒの家にホームステイさせていただくことが決まったのはステイ前日のことだったのだが、皆さんとても温かく迎えてくださった。後で聞くと妹さんは大学入試の直前だったらしい。そんな大変な時期に受け入れてくださったことを心から感謝したい。

実習についてはビデオを使って行ったのだが、反省点はいろいろ出てくるものやってみて本当によかったと思う。やってみなければ分からなかったことが本当にたくさんあった。どんなに準備していても十分ということは本当にありえないということを感じた。思いがけない質問にあせったりしたこともあったが、とても楽しかった。ビデオ実習に関しても韓国からアドバイスを送って下さった市岡先生、相談に乗って下さった先輩方、躓きながらも一緒に頑張った日本語教育の3年生みんなの協力があってこそできたのだと思っている。ここでの反省点を忘れずに必ず次に繋げていこうと思う。来年4月から始まる信州大学での実習が楽しみになってきている今日この頃である。

今年もこの研修旅行に参加することができてよかったと心から思う。今回の研修では、自分で見えているつもりで見えていなかった多くの部分に気付かされた。訪問初日の日記に書いていた、私が越えなければならなかったものが何か、やっと少しだけ見えてきた。変わっていく自分以上に、変わらなければいけない自分を見つけた。

最後に私たちを温かく迎え入れて下さった姜先生、李先生、中野先生、市岡先生、そしてどんな時にも笑顔を絶やさず私たちを気遣ってくれた学生代表の皆さんをはじめカトリック大学校の皆さん、このような体験を今年もさせて下さった沖先生、いろいろな刺激を下さった潮村先生をはじめとする社会心理専攻の学生さん、日本での実習準備の段階から常に相談やアドバイスをして下さった先輩方、支えてくれた友人に心から感謝したい。本当にありがとうございました。

韓国研修旅行を通して得たかけがえのない財産

信州大学人文学部3年 進藤みのり(日本語教育学専攻)

今回私は、この韓国研修旅行に参加することで初めて韓国を訪れる機会に恵まれた。以前から韓国について、私がチューターをしているカトリック大学校の留学生から様々な話を聞いていたのでとても興味を持っており、一度は訪れてみたいと思っていた。しかし、この研修旅行はただの旅行とは異なり、学生同士で文化的、学術的な交流をするという非常に大きな意味をもつものであった。

仁川国際空港に到着したときにゲートの向こうに垂れ幕を持ったカトリック大学校の生徒が見えたとき、緊張と期待で胸がいっぱいになった。はじめてみる韓国の町並みは、今まで自分があたりまえだと思っていた景色と全く異なっていた。当然だが看板や標識はハングルで書かれていてわからないし、韓国では車が右側を走ることも初めて知った。飛行機でたった1時間40分と、日本ととても近い国ではあるがやはり韓国は外国であることを改めて実感した。また、到着したカトリック大学校は私の想像をはるかに越える大きさと美しさで、とても驚いた。これからこの場所で1週間の研修が始まると思うと少し興奮した。研修院では、多くのカトリック大学生が私たち信州大学生を迎えてくれた。その

中に私のパートナーとなる韓瓊愛さんがいた。はじめはたくさんの韓国の学生に囲まれて緊張してしまい打ち解けられずにいた私に気を使ってくれ、うまくみんなの輪の中に入れるようにしてくれたのが彼女であった。この研修旅行で私にとって最も大きな財産となったのが、彼女をはじめとするカトリック大学生との出会いであった。彼女達と出会ったことで、今まで異文化であった韓国を様々な視点からとらえることができ、身近に感じる事ができた。例えば、韓国の携帯電話は、液晶画面のアンテナの本数が6本もあることや、韓国のカラオケには日本の歌がとても多く入っていること、日本の漫画や映画は韓国でも人気のあるものが多いことなど、日本には知りようもない韓国の様子をたくさん知ることができた。私は瓊愛さんのお宅にホームステイさせていただくことになっていたのだが、瓊愛さんの親友であり、今回ずっと一緒に行動してきた崔有繕さんが一人暮らしをしているというので有繕さんのお宅にお邪魔することになった。韓国では大学生の一人暮らしは少ないと聞いていたので、有繕さんの一人暮らしの様子を見せてもらえたのはとても貴重な体験だったといえる。彼女達と過ごした時間は驚きと発見、そして笑いにあふれていた。

また、今回私達は貴重な授業時間をお借りして日本語教育実習をさせていただくという機会に恵まれた。その中で私たち学部3年生は、信州の学生生活をビデオ教材を用いて紹介した。実習に向けては日本での事前準備の段階から困難の連続であった。信州の学生生活のビデオ紹介は昨年の実習でも行われており、昨年とは異なった視点から教材を用意することが必要であると考えた。そこで私たちは郷土や学校の紹介だけでなく、信州大学生の一人暮らしの様子を撮影したり、カトリック大学の留学生のインタビューを撮影したりと工夫した。編集の段階でも、日本の若者に人気のポップスをBGMとして入れることで日本の若者文化を知ってもらおうと考えた。しかし、教材に力を入れすぎてしまい、授業時間50分のうちの36分がビデオ上映の時間となってしまった。実際、本番の授業のときに生徒が教材について様々な興味を持ってくれたのだが、それを話し合う時間が短かったために話が盛り上がってきたところで授業時間が終わってしまった。これは反省すべき点である。今回このように日本語教育実習という大変貴重な体験をさせていただき、本当に学ぶべきところが多かった。今回学んだこと、反省したこと、よかったことは今後日本語教育に携わっていく中でぜひとも生かしていきたい。

こうして韓国研修旅行は、私に多くのかけがえのない財産を与えてくれた。それはどれもこの機会でなければ得ることができなかったものばかりである。人生の中でこうした機会はそう多くはないと思う。だからこそ、今回得た様々な知識や経験をこれからの人生において様々な場面で生かしていかなければいけないと思う。今回このような機会を与えてくださった諸先生方、お世話になった全ての方々に感謝いたします。本当にありがとうございました。

国際交流を通して見えた自国

信州大学人文学部 3 年 鈴江卓馬(日本語教育学専攻)

今回の韓国研修は 1 週間と短い期間ではあったが、色々なことを体験したり考えたりすることができた。その中で最初に触れておきたいのは、研修前に目標として挙げていた「自国の文化・言語の再認識」である。普段は自分の身近にあるために深く考えようとはしない自国の文化・言語を他国の人達と関わる中で再認識することができるのではないかと、というのが研修出発前の予想であった。これまでも何度か韓国を訪れたことがあったが、その時にも自分の国とは違った文化を感じることはできた。しかし、あまり韓国の人達と話したりする機会が無かったため、自分の使用する日本語や韓国語について深く考えることは無かった。そのため今回の韓国研修では特に、日本語を学んでいる韓国の人達と日本語で会話することができることを楽しみにしていた。

実際に韓国に行ってみて日本語を学んでいる韓国の人達と会話することによって、普段自分が使用している日本語を意識することができたと思う。相手がカトリック大学の 3 年生になるとある程度日本語を使用することができるので、あまり自分の使用する日本語について深くは考えようとはしなかった。意識しすぎて話しにくくなるようならば、むしろいつも通りの自分で自然に相手に接しようと思っていた。そうする事で積極的に相手と関わることもできると思ったからだ。しかし、カトリック大学の 2 年生相手にはそうはいかなかった。相手と話していると普段通りの日本語を使用したのでは意味を理解してもらえない事も多々あった。そんな時にはどのような表現を使用すれば相手に理解してもらえるか、その度に考えながら会話していた。何度も何度も自分の日本語を言い直していく中で、如何に日本語を外国語として学んでいる人達と日本語で会話をすべきかについて強く意識させられた。

また、どんな時よりも自分の使用している日本語を意識させられたのは、日本語教育実習として行った「信州の学生生活」に関するビデオ発表だった。今回の韓国研修では 50 分間のビデオ発表の時間を頂き、自分たちで一から授業を組み立てるという貴重な体験をさせてもらった。僕は幸運にも司会という重役を担当することができた。相手はカトリック大学の 3 年生ということで、日本語はある程度理解できると聞かされていた。しかし、音声だけで相手に自分の言いたいことを伝えなければならないため、ビデオの中の台詞や当日に教室で話す台詞はどのようなものが良いのか考えなければならなかった。文が長くなってしまう複文はなるべく避け、分かりやすく短い単文を多くしようと心掛けた。特に当日の教室で話す台詞は一度迷ってしまい更に説明しようとする、どんどん難しい日本語が口から出てしまい混乱してしまった。やはり授業を自分たちで作るということは簡単なことではない。本番で上手く話そうと思ったら、それ以上の練習や細かな授業の計画等を事前に準備すべきである。ビデオ発表に関しては、単に日本語学習者に声だけで相手に

自分の言いたいことを明確に伝えなければならないという問題以上に、授業の組み立て方の難しさという問題もあった。このことに関しては今後更に考えていく必要がある。

このように今回の韓国研修では自分の使用している日本語を強く意識することができたと思う。この体験はこれから自分が日本語学習者と関わっていく際に役立つものであるが、他にも役立つ体験をすることができた。それは自分が異文化の中で「お客様」として扱われることである。今回の韓国研修は現地に韓国語を学びに行ったのではないし、私達を迎えてくれたカトリック大学校の人達は日本語を学んでいたのも、日本への留学生たちが感じているであろう異文化の中での疎外感を感じることは無かった。しかし、異文化の中で日本語教育の現場を見学することができたり、また自分達が現地で授業を担当させてもらったりと、異文化の中で学んでいるという意識は常に自分の中にあった。そんな緊張感を日本に留学してきた人は持っているに違いない。普段自分が関わっている留学生と同じような気持ちを味わえたことは、これからの自分の留学生との付き合い方のあり方に対して大変参考になるものであった。どのようにすれば相手に「お客様」意識を感じさせないで済むのか、またはどのように扱われることを相手が望んでいるのか、というような事を今後も続けて考えて行きたいと思う。これは自分で数多く留学生と関わっていく中で実体験を通して考えていかなければならない問題であるので、今後も時間をかけて考えを深めて行きたいところである。

これまで述べてきたように、今回の韓国研修ではこのように他国の人間と関わることでしか得られないような貴重な経験を数多く体験させてもらった。

だが、今回の韓国研修で一番印象に残っているのはそんな事ではなく、カトリック大学校の人達の温かさである。今回の国際交流に関して事前の準備は勿論のこと、交流中もずっと僕達の身の回りの世話をしてくれた事。そして、緊張していた僕の背中を「大丈夫だよ」って力強く後押ししてくれた心優しい人達の「ぬくもり」を僕は一生忘れないだろう。今回の韓国研修では何よりも他人と付き合う時の、相手に対する心遣いの大切さを知る事ができた。自分の生活にこれ以上役立つことは無いであろう。今回の盛り沢山の韓国研修の感想はとにかく「満足」の一言に尽きると思う。最後に、今回の韓国研修で僕を支えてくれた周囲の皆様に感謝の言葉を申し上げます。本当にありがとうございました。

韓国で何を得たか

信州大学人文学部 3年 福本奈央子(日本語教育学専攻)

10月20日から10月26日の日程で今年もまたカトリック大学校との交流が実現することになった。去年は参加できなかったのだが、今年はゼミ長をやらせていただいているということもあり、幹事団の一員として参加することになった。今年も去年とはまた違う雰囲気の中で社会心理専攻、東洋史専攻の学生も同行することになり、勉強を追及するというよ

りはカトリック大生との交流を重視しようということで全体の流れを進めていった。しかしやはりせっかく日本語教育の生の現場に行くわけだから、実習や授業参観・参加の時間をいただいて、こちら側も準備していくことになった。この準備に直前まで追われたため実感を伴わないまま出発日を迎えたのだが、名古屋空港行きのバスに乗ると徐々に興奮してきてがぜん楽しみになってきた。ゼミのみんなと1週間も一緒にいられるし、まだ見たことのない食べ物や空気、韓国という国に生きる人たちと出会うことに興奮してはしゃいでしまった。韓国のインチョン空港に到着し、そのまま高速バスでソウルに向かい、カトリック大の研修院に着いたのは夜だった。しかし、カトリック大のみなさんは笑顔で対応してくださって、これは私たちが滞在した1週間、一貫して変わることはなかった。

次の日から様々なイベントが押し寄せてきた。1日目にはスピーチコンテストがあったのだが、ここではとても質の高い日本語のスピーチを拝聴することができた。学んでいる言語を母語としている国に行けば必要にせまられて簡単に上達するであろう言葉を、自国、この場合は韓国語を母語としている韓国でここまで習得していることに私はとても感動した。カトリック大生の勉強に対する意欲にも感動し、とても得るものがあったと思う。この日の夜にはカトリック大生主催の歓迎会・ゲーム大会があった。温かい歓迎の言葉と一体感を感じることでできたゲームで大いに盛り上がり、とても楽しんだ。

22日は授業参観・授業参加という大きな、この研修の目的でもある予定が組まれていた。初めて目にする生の日本語教育という現場は想像以上に大変なものなのだ改めて感じた。教育という面では小学校で教えようが、英語を教えようが、「どこで」や「なにを」はあまり問題ではないと思う。「いかに」ということがとても重要なのではないだろうか。私は中野先生の授業を見学させていただいたのだが、いかに生徒を参加させ、わかりやすく、興味を持ち続けるように教えるか、ということ学ばせていただいたように思う。また私たちが見た現場という表の部分だけではなく、見ることはできない裏の努力があるのだとも感じ、その努力がとても大切なのだと感じた。また授業参加ではカトリック大生の日本の大学生に対する六つのテーマにそったインタビューに答えていくというものだった。ここでも日本語を学ぶ、日本について知るというカトリック大生の真面目な態度に触れて刺激を受けた。

23日はこの研修旅行で一番楽しみにしていた自由行動・ホームステイの日程が組まれている日だ。観光したところはどこも興味深く、とても楽しいものだったが、私が最も印象深く記憶していることは、パートナーの親切心である。カトリック大生はいつも笑顔で、準備が大変だったり、自分たちの勉強もある中で私たちに関する雑務に追われても疲れた顔を見せることはなかった。パートナーも常に私を気遣い、優しく私が楽しめるようにと気を配ってくれた。行った場所より何より人間の温かさ、親切心に触れることができたのが、私は一番感動したことだった。

24日は作成したビデオを見せながら行う実習と、信大側主催の交流会があった。この準備に多くの時間を費やしたので、どちらも3年生を主にみんなで協力して成功させたいという気持ちが強くあった。結果はどちらもなかなか満足のいくものだったと思う。

この研修旅行を通して自分に対する反省点がたくさん見つかった。カトリック大のみんなにはもちろん、信大のみんなにも迷惑をたくさんかけた。しかし、将来への考えや、今の自分、国を越えた人間の温かさに気付くきっかけになった。とてもよい経験ができたと思う。このような機会を与えてくださった先生方に感謝の気持ちでいっぱいである。ここで学んだことや、気付いたことをしっかりと自分の糧にして、これから成長していきたいと思う。

礼をつくすということ

信州大学人文学部3年 向出真理子(日本語教育学専攻)

韓国言語文化研修にあたって、「心をひらき、礼をつくして交流すること」という全体目標がたてられた。加えて、私は昨年に続き二度目の参加になることから昨年の経験と反省をふまえて、「自分自身の成長をみること」、「自文化を客観視しながら異文化を楽しむこと」という私自身の目標をたてた。また今回は幹事を任せられ、その役割と責任をもって韓国カトリック大学校を訪問した。

1週間という長くも短くも感じた研修期間の中で、私は自己をみつめることが多々あった。それは自分が今どういう場におかれているのか、何をすべきなのか、何を伝えたいのかを考え、またそれをどうやって伝えればよいかということ、考えられるようになったということである。昨年パートナーをはじめとして多くの学生と話をしている中で、言いたいことがあるのにうまく説明できない、理解してもらえていないという場面があった。そこでまず韓国人学生に対しては、簡潔でわかりやすい日本語で接することを心がけた。この点に関しては、少なくとも昨年に比べての自分の成長をみることができたといえる。しかし昨年より成長していきたい、もっと使いたいと思っていた韓国語は、まだまだ勉強不足だということを感じずにはいられなかった。信州大学側の参加者に対しても、私は幹事として伝える立場にあった。韓国を訪れる前から先生方にご迷惑をおかけすることが重なり、その度に自分と向き合った。韓国では自分の出す指示が参加者全員の行動につながるということを考えると、次に何があるか、自分はどうすればいいかを自然と意識できるようになった。大きな問題が起こらなかったことは、なによりであった。

自己をみつめることは同時に、相手をみつめることにもつながった。昨年の研修で、フリーターキングというかたちで日本語教育実習の時間が与えられた。多くの学生と接する機会を得たが、カトリック大学校の学生からあまり話を聞くことができなかったという反省点があった。特にまだ日本語学習が進んでいない学生のグループでは、自己紹介と写真

などを見せるだけで時間が経ってしまった。何か質問がないか、話したことが理解されているかといった確認など、こちらからの働きかけが必要であった。そして同じ内容を話すにしても、グループやその日本語能力に合わせた話し方をもっと意識すべきであった。これらはすべて相手をよく理解しようとする配慮が欠けていたためのことである。この反省をふまえ、今年は「信州大学と松本の紹介」の日本語教育実習に臨んだ。準備の段階から私を含む3年生全員が、相手が知りたいと思っていることは何か、それをどうすればうまく伝わるかを考えていたように思う。授業に参加してくれた学生が真剣にビデオをみて、わずかな時間の中でも質問してくれたことがうれしかった。

帰国する前日の夜にひらいていただいた送別会で、私は信州大学の代表として感想を述べた。1週間を振り返ってみると、ホームステイや韓国語講座、日本語教育実習、日本語の演劇発表と今年も本当に楽しくて、充実した交流期間であった。しかし私が何より言いたいと思っていたことは、カトリック大学校の先生方と学生代表のナニョンさん、学生の皆さんに対するお礼だった。カトリック大学校の皆さんは常に信州大学の学生のことを気にかけてくれ、笑顔で私たちのお世話をしてくださった。研修院で朝食をいただく日に、私は集合時間より早く部屋に向かったことがあった。少しでも手伝えることがあればという気持ちからであったが、カトリック大学校の学生の何名かがすでに座布団を用意してくれているところだった。その上私が手伝おうとすると、「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」という言葉が返ってきた。結局そのあとおにぎりを並べるのを一緒にしたが、朝食に限らずすべての活動の前にもこうやって先回りをして準備してくれていたんだなあということに気づき、彼女たちの笑顔に胸がいっぱいになった。「礼をつくす」という目標を持っていった私たちは、それ以上に礼をつくされていたのである。礼をつくすということはまず相手を想うことから始まる、ということを私は学んだように思う。

最後に私たちを本当に手厚く迎え入れてくださった姜先生をはじめとするカトリック大学の先生方と、学生の皆さんにあらためて御礼申し上げます。また今回も素晴らしい機会を与えてくださった沖先生、あらゆる面でサポートしてくださった潮村先生と先輩方に感謝いたします。

韓国での経験から得られたこと

信州大学人文学部3年 矢嶋直子(日本語教育学専攻)

昨年1週間カトリック大学で過ごしたことで、韓国は友人の住む近い国であり、常に意識するようになった。再びカトリック大学校へ訪問できることは、再会の喜びと新しい出会いへの期待で、行く前からとても楽しみだった。ここでは今回得られたことを、個人的に立てた目標と全体の感想から述べたい。

今回の研修旅行では、二点を自分自身の目標とした。一点目は多くの人と触れ合うとい

うことである。実際に会って話すということは、相互理解のためにも大切なことだ。このような機会でなければ出会えなかった方々と多く触れ合いたいと考えた。二点目は、ホームステイ先のご家族と少しでも韓国語で話すということだ。自分の言葉で感謝の表現だけでも話すことで、少しでも気持ちを伝えようと考えた。

実際一点目はあまり多くの人とは関わらず、積極性が足りなかったと反省している。しかし受身でないよう心がけたことを今回の収穫としたい。ホームステイ先での交流は、やはりパートナーに頼る部分が大きかった。ご家族の目を見て、簡単でも昨年よりは丁寧に挨拶をして喜んで頂けたようだった。韓国語をさらに勉強したいという気持ちへとつながった。

特に印象に残っているのは日本語スピーチコンテストと日本語による演劇『新ももたろう』である。スピーチコンテストでは、外国語でのスピーチというだけでも難しいことだと感じたが、内容のすばらしさに感動した。将来に対しての姿勢などで、自分と同じようなことを考えているということも面白く感じた。どの方も構成がよくできており、考えさせられることばかりで大変勉強になった。次に『新ももたろう』では話の展開や演技が工夫されていて、心から楽しむことができた。セリフも聞き取りやすかったのも裏には大変な努力があるのだろうと感じた。自分たちで脚本から手がけたと言うことを聞き、大変驚くと共に自分から何でも挑戦しようとする韓国の学生の積極性を見習わなければならないと感じた。歓迎会やその他の準備をしてくれている人たちが出演しているのを見て、自分は実習やゲームの準備だけでも周囲に気が回らなくなっているのに、私達に気を遣いながらの練習はさぞ大変だったであろうと自分の態度を反省した。

実習や信大主催のゲームをさせていただいたことは、日本語教育を体で実感するいい機会だった。実習は日本での準備が完全ではなく、韓国へ行ってからも質問などを予測し練習した。先輩方や先生方、周囲にもご迷惑をおかけし、早くからの準備と周囲との協力、日本での模擬授業の必要性を強く感じた。実習を実際やってみることで、授業を一つするまでの準備などの流れが少し見えただけでも大きな収穫だった。また、ゲームに関しては一緒に楽しむと言うことを目的としていたので、それは思った以上に達成できたと思う。皆楽しんでくれているように見え、皆の笑顔が見ることができてうれしかった。日本語での説明など不安は多くあったが、周りの日本人からの助けもあって無事に終えることができたのだと思う。

プロの日本語の授業を見学させて頂いたことで、生の日本語教育の現場に触れ、難しさを感じたと共に自分の勉強していることの面白さも改めて知ったように思う。普段学校の机の上で理解したつもりになっていることを実際使用し、平明な日本語で説明してみることは簡単ではなかった。まずは分かりやすく日本語で説明するということを目指し、さらに日本語、日本語教育を学ばなければならないと実感した。

1 週間をカトリック大学の皆さんと一緒に寝泊りして過ごしたことで、細かいところまで気を配って頂いたことに感謝すると共に、自分の至らなさをつくづく反省している。準備や片づけなど任せっぱなしにしてしまい、そこから一緒にやることでもっと交流もでき、深まったのではないかと思う。今度カトリック大学の学生を信州大学に受け入れることができるならば、精一杯楽しんでいただけるよう、尽くしたいと思う。

最後に、今回このような交流の機会を与えてくださった先生方に、感謝を申し上げます。

韓国言語研修旅行に参加して

信州大学人文学部 2 年 田口愛葉(日本語教育学専攻)

以前から行きたいと思っていた国の一つである韓国に、今回研修旅行という形で訪れることができた。不安はあったものの、カトリック大学校の先生方や学生さんたちの温かい歓迎により不安はすぐに期待へと変わった。今回は日本語授業見学で実際の日本語教育の現場を見させていただき、とてもいい経験になったし、日本語授業参加でも、むこうの学生さんと楽しく会話をしながら日本文化について話すことができ、とても充実していたと思う。そして、フリートーキングがあった。

私たち 2 年生の日本語教育実習としてフリートーキングをやらせてもらうことが、今回私にとって一番楽しみなことであり、不安なことであった。私がフリートーキングの材料として用意していったのは、家族の写真、地元・岐阜県飛騨地方のガイドブック、趣味であるお菓子作りの本や、実際に自分で作ったときの写真である。私は、用意した話題の中でも一番話しかかった自分の趣味について主に紹介しようと思っていたので、あらかじめいくつかの質問を用意し話の途中で質問しようと考えていたのだが、カトリック大学校の学生さんが予想以上に興味を示してくれて、私が聞かなくてもどんどん質問してくれたので、考えていたより話が進めやすかった。授業の終わりに聞いたカトリック大の学生さんの感想の中に、私の話がおもしろかったというのがあり、それがとてもうれしかったし印象的であった。与えられた時間が 1 グループにつき 10 分だったので、どの話題も紹介することができるだろうと考えていたのだが、ゆっくり話すこと、分かりやすい日本語で話すことを意識しながら進めていったら、時間が足りない程であった。自分がいつも話しているペースで大まかな時間を配分していたので、フリートーキングでは、普段自分が話しているときはかなり早口なんだなということを感じたし、分かりやすい日本語を選ぶのに苦労したりしたことで、伝えるということの難しさを実感した。

4 日目の市内見学とホームステイは、私が楽しみにしていたもう 1 つのことであった。昼はパートナーと 2 人で町へ出かけていき、買い物をしたり、私のお土産選びをしたりしてソウルを思う存分楽しむことができた。町を歩いていると、私と同年くらいの女の子同士が腕を組んで歩いている姿がよく目に入り、日本ではあまり見慣れない光景だけに文

化の違いを感じた。そう感じたものの、私も実際パートナーと腕を組んで歩いていたし、全然抵抗もなかった。夜は、早めにパートナーの家に帰り、ご両親と一緒に夕食を食べ、私が持っていった家族の写真や日本での生活の写真を見ながらいろいろな話をした。ただ、私は全然韓国語が話せなくて、パートナーに全部といていいほど通訳してもらっていたので、もうちょっと韓国語が話せたらなと少し後悔した。また、私がホームステイすることでパートナーのお姉さん夫婦が会いに来てくれ、ソウルタワーに連れて行ってくださり、私はソウルの綺麗な夜景を楽しむこともでき、貴重な体験だった。お兄さんは韓国語の通じない私に英語で話しかけてくださって、その心遣いがとても心に染みだのを覚えてる。パートナーをはじめ、ご家族の方がとても優しく接して下さってうれしかったし、ご家族の方とたくさん時間を過ごしたことで韓国文化を満喫できたように思うので、いい体験ができたと思う。

今回の研修旅行で印象深かったのは、カトリック大の学生さんの日本語のうまさだった。人それぞれレベルの違いはあるものの、自分がかれこれ6年以上も勉強してきた英語の力と比べても比べものにならないほどのうまさだと感じた。私のパートナーは、日本語は第二専攻だと言っていたが、日本語がとてもうまく、それでも本人はまだ勉強したいと言っていた。どの学生さんもそうであったが、その勉強意欲には脱帽したし、また、驚いてばかりいられないと思わせてもらったことをありがたく思った。また、カトリック大学の先生方や学生さんたちの心配りには1週間感謝しっぱなしだった。私たちが韓国での生活を快適に過ごし、心ゆくまで楽しめたのもすべてあちらの皆さんのおかげであると思っているし、そのことに心から感謝している。次の交流は再来年の予定だと聞いたが、その時も是非参加したいと思うし、また、今回の研修旅行で得た友達との交流をこれからも絶やすことなく続けていきたいと思っている。

韓国研修旅行で得たもの

信州大学人文学部2年 中島葉子(日本語教育学専攻)

私にとって初めての海外旅行となった韓国研修は、本当にたくさんの経験をし、さまざまな収穫があった。出発する前は、韓国に行くってからのことよりも飛行機が無事着くのかということに一番不安があった、というのが正直なところである。韓国に行くってからのことについては、どんな人たちが迎えてくれるのだろうかとか、どんな文化に出会うのか、どんな日本語教育実習になるのかといった思いで、ただひたすら楽しみだった。

韓国に行くって得たものについてまず述べておきたいことは、多くの友達や先生方との出会いについてである。カトリック大に到着してから、カトリック大の学生のみなさんや先生方が真っ先に歓迎会のような場を催してくれた。楽しみにしてきたとはいっても、学生の方とどれぐらい意思の疎通ができるのかという点についてはまったくわからずにいた。

今考えると、初めは少々肩に力を入れて頑張っていたかもしれないが、カトリック大の学生さんたちも本当に気さくに話してくれたので、すぐに普通の日本人の友達と変わらないような会話ができていたと思う。特に私はホームステイをさせていただいたパートナーの友達とは、恋の話から日本と韓国の関係史のような話や韓国文化の話まで交わすことができた。楽しかったというのはもちろんだが、ショックも受けたし、考えさせられる話もあった。多くの学生の方と話す中で、さまざまな日本語能力のレベルを考慮しながら話し、いろんなジャンルの話を韓国という国の人と直接できたという経験は大きな収穫であった。

次に、日本語教育実習について述べておきたい。私たち2年生はフリートーキングという形の授業に臨んだ。事前に先輩方からいただいたアドバイスもあり、また実習当日までに仲良くなっていった学生もいたので、あまり緊張はせず、とにかく積極的に話してみようという気持ちだった。1グループにつき10分という時間で出身地の紹介や家族の紹介、大学生活について話をした。途中、なんとなく聞いている学生の側が「聞いているだけ」という雰囲気になっていると感じたら、「あなたたちの場合はどう？」というふうに聞き返したりしてみた。両親の職業を言うときに職業名を言うだけでは伝わらないグループもあり、理解してもらうのに苦労したということもあった。また「眠い」と「眠たい」の違いは何かと聞かれて、明らかに使用する場面が違うということは、自分の中ではわかっているのにうまく説明できないということもあった。全体としては楽しくフリートークができたという印象であり、また私にとっても「平明な日本語でわかりやすく伝える」ということを勉強できたということは貴重な体験であった。

今回の研修旅行を振り返ってみて、反省点もいくつかある。まず、実際に日本語を勉強する韓国の学生と話す中で、自分の日本語に関して説明する力が本当に足りないことを痛感した。以前から授業の中で言われてきた、「日本語を教えるにはまず日本語を知る」ということが、どういうことなのか、またどれほど大事なことなのかということを今回知った気がする。日本語自体にもっと関心を持ち、細かく知っていかなければならないだろう。また、旅行そのものに関していえば、やはり日程の後半になるにつれて、疲れをみせてしまった。今思い返すと、カトリック大の学生に「疲れましたか？」と聞かれたことが度々あった。大丈夫、と答えていたけれど、カトリック大の方々も疲れている中、最後まで明るく応対してくれたのに対して、申し訳なかったと思う。2年生とはいっても、運営のほうは上級生にまかせっきりで、ただ日程に沿って目いっぱい楽しんでしまった。それもよいことだとは思いますが、今後この交流の根を絶やさないように、「礼を尽くして交流する」ということを忘れないようにしていきたい。

韓国研修旅行全体を通して、楽しんで行ってこられたのはよかったことだと思う。今回つくった友達を大切に、新しく学んだことや発見したことを、今後の学習に役立てていきたい。

韓国研修で得たものの数々

信州大学人文学部 2年 上田尚子(社会心理学専攻)

今回の韓国研修は、私にとって偶然舞い込んできたとても魅力的なお話でした。私は、海外旅行をした事もないし、外国人の友達がいるわけでもなく、日本という一つの社会から外に出たことがありません。こんなに情報も行き交い、交通も便利になった時代であるのに自分の世界の狭さがあったいなあ、といつも思っていました。そんな時に今回のお話がありました。個人的に旅行に出かけただけではこのような体験は絶対にできないであろう、この研修旅行にぜひ参加させていただきたいと思いました。そしてこの素晴らしい機会にぜひ、同年代の韓国の子と日本語や韓国語でいろんな話をしたり、観光したり、授業に出たりして、交流していきたいと思いました。韓国研修の事を考えるとすごく楽しみで、胸が高鳴っていました。しかしながら、初めての海外旅行という事もあり、初めての異文化交流ということもあって、不安もありました。韓国語をろくに話せない私で言葉の壁は大丈夫なのだろうか、友達はできるのだろうか、1週間も向こうでやっていけるのだろうかという心配は多くありました。しかし、韓国に着いた時からそのような不安も少しずつ和らいでいきました。

一番始めに、空港でカトリック大学のみなさんが、「信州大学のみなさん ようこそ」と書かれた垂れ幕をもちながら、笑顔で迎え入れてくれたことは、かなりの安心を与えてくれました。ご飯の時や歓迎会などの会が開かれるときも、たまたま隣になった方でも皆フレンドリーで、積極的に話しかけてくださり、いつも笑顔で接してくださいました。気さくな方ばかりだったなあという印象があります。また、信州大学の私たちを楽しませるためにたくさんの企画やもてなしの数々などのおかげで、カルチャーショックをあまり受けることなく、馴染んでいきやすかったように思います。感謝で胸がいっぱいです。

このような恵まれた環境の中で多くのことを感じとることができました。まず、韓国の学生の方々の「学習意欲」について驚かされました。日本語教育を受けてみえる方々とのお話だったので、日本語を少しは話せるのかなあ程度にしか思っていなかったのですが、皆さんとても上手でした。ゆっくり話せば、十分に意思疎通が出来るほどだったのです。そして、日本語スピーチコンテストや日本語演劇や韓国語講座は、すごいという言葉でした。自分が外国語でここまでのスピーチや、ここまでの演技ができるだろうかと考えてみると、信じられません。学校を休学してまで、留学のためや日本語上達のために勉強なさっている方々が多くいらっしゃるようでしたが、その「意欲」は自分に欠けているものであった

親への挨拶を用意していて、うまく言えるかどうか不安でしたが何とか伝えることができ、その時は本当にほっとして、また嬉しかったです。また、私が日本人ということで、味噌汁を作っていただいたこと、手作りのキムチやのりなどをお土産に持たせて下さったことは本当に感動しました。また、ヒョンジュさんとは恋愛や学校、友達のことなどたくさんのお話がありました。また、韓国に行って会いたいです。

次に、私がとても感動した出来事として演劇「新ももたろう」が挙げられます。一生懸命な演技からは、私たちを楽しませようという気持ちがたくさん伝わってきて、胸がいっぱいになりました。細かいところまで準備が行き届いていて「嬉しい」、「ありがとう」と何度も思いました。

そして、研修も終わりに近づき、韓国で過ごす最後の夜。送別会も思い出がいっぱいです。中でも、司会のユ・ナンヨンさんが感動で声をつまらせ泣いてしまった時に、他のカトリック大学の学生が日本語で「がんばって。」と声をかけた場面、姜先生がなぐさめていらした場面が印象的です。日本人は感情を見せることに臆病になっていて、感情を見せることに戸惑ったり、感情表現が苦手であったりすると思います。しかし、韓国では違いました。感情を上手く素直に表現することが自然とできていて、また、コミュニケーションがとても友好的であり、かつ敬意を払うことができていました。このような場面を目の当たりにして、本当にあたたかい人たちだなあと感じました。そして、この送別会で私たちは、たくさんのお話を通してたくさんのお話をしました。私はこのとても貴重な出会いを、今回のみで終わらせずに、彼らとは今後も何らかの形でつながってみたいと心から思っています。今回は私たちが韓国へ訪問しましたが、いつか皆さんが日本に来られた時は、今度は私が皆さんからもらったような「あたたかさ」を伝えたいと思います。その時までには、皆さんと日本語だけでなく韓国語でも会話できるように勉強したいです。

最後に、このようなかけがえのない出会いを実現させていただいたこと、本当に感謝しています。この貴重な経験をこれからの私の人生に活かしていきたいと思っています。ありがとうございました。

かけがえのない経験

信州大学人文学部 2年 宮脇淳暢(東洋史専攻)

去る10月20日から26日の6日間にわたって渡韓しての研修に同行し、貴重な体験をさせていただいたことに、またこのような機会を与えてくださった沖先生、潮村先生そしてカトリック大学の姜先生に感謝いたします。

私が韓国を訪問するのはこれで2回目となる。以前、訪れた時は目に映るものすべてが初めてのことで戸惑いを感じたり、私の好奇心を非常に掻き立ててくれたりといった感じであった。そして、今回の韓国研修である。これは、先ほどのものとは大きく性格を異に

するものであり、特に同じ大学生との交流に主眼を置いていた。以前の韓国訪問では、同年代の学生と触れ合う時間は全くなく、同世代の彼らがどんな生活を送っているのか興味を持っていたので、それを知る絶好の機会となった。

さて、研修に先立ち、私は個人的な目標または目的を決めていた。大きく分けると二点だが、それらは「韓国の文化・歴史を体験的に知る、友人をつくる」であった。日韓共催のワールドカップを前後して、両国はお互いを見つめなおし親近感を持つに至ったと言われるが本当にそうだろうか。私は、このことに半信半疑であった。確かに日本では、韓国に関する情報が満ち溢れているが一面的な情報に偏っていると思う。では、韓国ではどうであろうか。この疑問を解決するのは、糸口として自らの身体をもって体験するほかないと考えるに至ったのである。これは、ひいては良き友人をつくることに結びつくのではないだろうか。

一度、訪れたことがある韓国の土を踏むとどこか懐かしいようなそんな感覚を覚えた。それと同時にこれから始まる1週間という期間がどんなものになるのだろうか、という期待感と不安感が身に迫ってきた。しかし、そんな不安はすぐに解消されたのは言うまでもないだろう。滞在期間中の絶えることのない温かい歓迎と気遣いには、胸を打たれ「お返しにできることはなんだろうか」と考えると全体目標であった『心を開いて、礼を尽くして交流する』が浮かんできた。1週間の間、このことに気をつけて交流することに努力したが、もし不足部分があったなら私の努力不足だったということかもしれない。

驚いたことは、学生の日本語の上手さである。そして、自分の伝えたいことを日本語で伝えようとするひたむきさには感銘を受けた。私は大学に入ってから、韓国語を第二外国語として勉強しており、また留学生との交換日記を通して書くことは何とかできるもの話すことになると全くできない。学ぶ言語は違えども、同じ学ぶものとしてどこに動機付けがあるのか大変気になる場所である。どうやらそれは経済という実用的な面だけではないようである。日本語を学んでいる学生も、日本に関心を抱いている学生も多く、並々ならぬ関心を持っていることが窺えた。学生と話していると、日本の現代文化の一側面を当の日本人より深く詳しく知っていると思わせることがしばしばあったが、それは近年、大量に日本の情報が入ってきていることの証明であり、一面的(漫画やテレビアニメ、ビデオアニメ)であるが日本文化が根付いていることの証明であるようにも感じた。こうしたことをきっかけとして、もっと日本について知りたいという欲求が噴出し日本文化を学ぶ者の意識の底流に根幹があるようだ。翻って、日本の韓国ブームというのは食やエステが中心的でまだまだ知らないこと、入ってきていないことはたくさん存在する。いかに韓国を知らないか、韓国ブームが今日的なものかである。

ところで、今回の研修で特に参加した二年生に限って言うとメインは「FT(フリートールキング)」であった。私はこの体験を通して、何かを日本語で伝えることの難しさを改めて

感じた。カトリック大学の会話の授業を1時間割いて、信州大学の学生が会話の相手役として授業に参加するという形態をとったのだが、グループを日本人学生が回って各自が用意した題材で会話を進めていくものであった。誰かに何かを伝えるという行為は、私たちは普段の生活の中で行っており、しかも多くは注意を払わずに行っていると思う。しかし、外国語を学び始めた人に対しては、言葉を簡潔明瞭なものにする努力や配慮が必要である。また会話する相手によっては、話す速度に気をつけなければならない。こういったことは、今まで私は経験したことがなかったように思うし、またそのような場を持つこともなかった。実習に参加してみて、自分は分かりやすく伝えることができたろうかと自問自答したが答えを出すことは出来なかった。グループによって反応は異なり、関心を引いたかどうかさえ疑わしい時もあったからだ。しかし、参加していた数人の学生が「分かりやすかった」と感想を伝えてくれた時は素直にうれしかった。「どのように」伝えるかに重点を置き、事前に内容の準備と整理、そして構成を行うのが大変だったがそれが実った証である、というのはいささか肯定的過ぎる見解であろう。この点に関しては先輩方に何度となく伺い助言を得ることになったが、丁寧なアドバイスを与えてくださったことに感謝している。

1週間という期間は、普段の生活の中ではともすると何とはなしに過ごしてしまうことにもなりかねないが韓国に滞在した期間は、私にとって充実したものであった。

出発前、目標に設定した事項は大部分が達成されたと思うが、ただ心残りなのは、カトリック大学の学生と韓国語で会話することが出来なかったことである。これは今後の私の課題である。次回、訪れるまでには少しでも会話が出来ようになっていきたいものである。終わりになるがこの研修は、けっして一過性のもので完結するのではなく、『始まりの終わり』になるように積極的に出会った学生との関係性を築いていきたいと思う。「さようなら」は別れの挨拶であると同時に「こんにちは」の挨拶でもあるのだから。